# 泉福寺（甲賀市水口町泉）所蔵　木造四天王立像について

和澄浩介

## 一、はじめに

甲賀市水口町泉に所在する泉福寺は伝教大師最澄の創建とされる天台宗寺院で、かつては泉寺とも呼ばれた。寺伝によると当寺の本尊地蔵菩薩半跏像は、仏師定朝が京都壬生寺や木ノ本浄信寺の本尊を手掛けたことを契機に造立したとされる。本尊像は十三世紀の造立と考えられるが、当寺にはこの他にも複数の古像が伝来している。それらは昭和五十八年（一九八三）に滋賀県が実施し、当時の水口町が調査した美術工芸品（彫刻）実態調査によってその存在が確認されていたが、詳細な調査は行われていなかった。この度幸いにもこれらの像について精査の機会を得られ、その詳細が判明したため、ここにもっとも古様を示す四天王像（以下本四天王像と呼称する）について若干の考察を交え報告する(一)。左脇壇（向かって右）左方に広目天、右方に増長天、本尊の厨子を据える堂中央の須弥壇を挟んで右脇壇左方に多聞天、右方に持国天を安置する。本稿では便宜上、もっとも左方の広目天像から順に記述する(二)。

## 二、形状

### 広目天像

単髻を結う。こめかみ付近に炎髪を逆立てる。鬢髪を耳中央で巻き込む。炎髪をマバラ彫りとし、他は平彫りとする。前頭部に三角形の冠をあらわす。天冠台は炎髪より前方は紐一条―列弁とし、後方は無文とする。銅製の宝冠、冠繒を着ける。領巾と肩甲を着ける。胸甲と腹甲をベルトと紐で締め、前盾と腰甲を帯で締める。鰭袖と大袖の衣、籠手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣は前盾の前をU字に横切り、腰帯の左右にかかり先端を垂下する。瞋目閉口し、頭部をやや右下に傾け、右手に持った筆を見る。右手は肘を張り、胸の高さで筆を執る。左手は屈臂して後方に引き、掌をやや内に向けて腹の高さで巻子を執る。腰を右に捻り、左足を踏み出し、邪鬼の上に立つ。

邪鬼は閉口して頭部を左に向け、四肢を折り曲げて岩座上に伏せる。

### 増長天像

単髻を結う。こめかみ付近に炎髪を逆立てる。炎髪は耳上半を覆う。炎髪をマバラ彫りとし、他は平彫りとする。前頭部に三角形の冠をあらわす。天冠台は紐一条―列弁とする。銅製の宝冠、冠繒を着ける。領巾と肩甲を着ける。胸甲と腹甲は円環で結節したベルトと紐で締める。獅噛をあらわす前盾と腰甲を帯で締める。鰭袖と先端を結んだ大袖の衣、籠手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣は前盾の前をU字に横切り、腰帯の左右にかかり先端を垂下する。瞋目閉口し、右方を見る。右手は腰に当てる。左手は振り上げて戟を執る。腰を右に捻り、左足を上げて邪鬼の頭部を踏み、右足で邪鬼の臀部を踏む。

邪鬼は開口して頭部を左とし、正面を向く。左手で頬杖を突き、右手、

両足を曲げて岩座上に伏せる。

**多聞天像**

単髻を結う。こめかみ付近に炎髪を逆立てる。炎髪をマバラ彫りとし、他は平彫りとする。前頭部に三角形の冠をあらわす。天冠台は無文とする。銅製の宝冠、冠繒を着ける。領巾と肩甲を着ける。胸甲と腹甲を紐で締める。前盾と腰甲を帯で締める。鰭袖と大袖の衣、籠手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣は前盾の前をU字に横切り、腰帯の左右にかかり先端を垂下する。瞋目閉口し、わずかにうつむく。右手は振り上げて戟を執り、左手は屈臂して胸の高さで宝塔を捧げる。腰を左に捻り、右足を遊脚として邪鬼を踏んで立つ。

邪鬼は開口して頭部を右とし、正面を向く。右手は握って顔の下に添え、左手は伸ばして両足を曲げて岩座上に伏せる。

**持国天像**

単髻を結う。こめかみ付近に炎髪を逆立てる。鬢髪を耳上部で巻き込む。炎髪をマバラ彫りとし、他は平彫りとする。前頭部に三角形の冠をあらわす。天冠台は現状ほぼ無文だが、一部に紐二条—列弁とした痕跡がある。銅製の宝冠、冠繒を着ける。領巾と肩甲を着ける。胸甲と腹甲を紐で締め、前盾と腰甲を帯で締める。鰭袖と先端を結んだ大袖の衣、籠手を着ける。下半身に裳、裙、脛当を着け、沓を履く。天衣は腰帯の直下を横切り、左右にかかり先端を垂下する。瞋目開口し、頭部を左に振る。右手は振り上げて三鈷杵を執り、左手は腰に当てて納刀した刀の鞘を執る。腰を左に捻り、右足を上げて邪鬼の頭部を踏み、左足で邪鬼の臀部を踏む。

邪鬼は閉口して頭部を右とし、右斜め前方を向く。両手で頬杖を突き、足を曲げて岩座上に伏せる。

## 三、品質・構造

**広目天像**

一木造。彫眼。古色仕上げ。

頭体幹部を、木心を籠めたヒノキかと思われる針葉樹の一材から彫出する。内刳りは施さない。木心は像のやや前方を通り、面部では外れる。背面、右腰脇などに板材を矧ぐ。両腕は肩、肘、手首で矧ぐ。両足先に別材を矧ぐ。翻る袖部、天衣垂下部に別材を矧ぐ。

邪鬼は木心を左後方に外すかと思われる一材から彫出する。右腰から左足先にかけて、左手、左頬などに別材を矧ぐ。

**増長天像**

一木造。彫眼。古色仕上げ。

頭体幹部を、木心を籠めたヒノキかと思われる針葉樹の一材から彫出する。木心は像のやや後方を通る。腰下から膝付近にかけて内刳りを施し、背板を当てる。両腕は肩、肘、手首で矧ぐ。両足先に別材を矧ぐ。翻る袖部、天衣垂下部に別材を矧ぐ。左脚部や右腰脇部にも別材を矧ぐか。

邪鬼はほぼ全てを一材から彫出する。

**多聞天像**

一木造。彫眼。古色仕上げ。

頭体幹部を、木心を前方に外したヒノキかと思われる針葉樹の一材から彫出する。内刳りは施さない。両腕は肩、肘、手首で矧ぐ。両足先、天衣垂下部に別材を矧ぐ。翻る袖部、左腰の張り出し部などに別材を矧ぐか。

邪鬼は左手指先以外の全体を一材から彫出する。

持国天像

一木造。彫眼。古色仕上げ。

頭体幹部はヒノキかと思われる針葉樹の一材から彫出する。木心は左前方にわずかに籠めるか。内刳りは施さない。両腕は肩、肘、手首で矧ぐ。右大腿部から脛部にかけて一材を矧ぐか。両足先、天衣垂下部に別材を矧ぐ。翻る袖部、左腰の張り出し部などに別材を矧ぐか。

邪鬼は全体を一材から彫出する。

## 四、保存状態

広目天像

両肩以下、左足先、天衣垂下部、持物、光背、岩座以下、銅製装飾、以上後補。邪鬼は別材部候補。

増長天像

右肘以下、左肩以下、左足先、天衣垂下部、持物、光背、岩座以下、銅製装飾、以上後補。

多聞天像

両肩以下、両足先、天衣垂下部、持物、光背、岩座以下、銅製装飾、以上後補。邪鬼は左手指先後補。

持国天像

右肘以下、左肩以下、両足先、天衣垂下部、持物、光背、岩座以下、銅製装飾、以上後補。

その他、いずれの像も頭髪、天冠台、面部、衣文、甲の縁、獅噛などの細部を中心に後世の彫り直しが入る。

## 五、考察

泉福寺は、『山中文書』（神宮文庫蔵）中の「柏木御厨年貢注進目録」（元徳三年・一三三一）にみえる泉寺がその前身と考えられている。当寺が所在する甲賀市水口町泉は、国道一号線や野洲川右岸に沿って湖南市と接する。周辺は野洲川右岸に迫った山裾が後退し、小さな盆地を形成している。北側の丘陵部には、県指定史跡東罐子塚古墳、西罐子塚古墳を含む泉古墳群と泉古窯跡など古墳時代中期から後期の遺跡が発見されており、古代寺院の痕跡は確認されていないものの、古くから開発が進んだ地域であったことがわかる。京都から東に抜ける場合、泉の地は盆地の入口に当たり交通の要衝とされ、近世には東海道の渡しである横田川（野洲川）の渡が設置された。

泉寺と称された泉福寺は、その寺名からも泉の中心的な寺院であったと考えられ、本四天王像の他阿弥陀如来坐像（十二世紀）、本尊地蔵菩薩半跏像（重文・十三世紀）などの古像が伝来する。また、境内には治安三年（一〇二三）に勧請されたと伝わる十禅師社（現日吉神社）が鎮座し、永正十二年（一五一五）年の銘を有する木造狛犬が現存する。泉福寺はこの日吉神社の存在からも、長く天台宗寺院としての法灯を引き継いでいることがわかる。

本四天王像の特徴と造立年代

本四天王像は全体を通して、頭髪や面部の表現、猪首である点、腰回りが太く重心を下方に置く点などが共通し、一具同時期の作であると認められる。特に注目すべき点として、いずれの像も兜を被らず髻前方に

三角形の宝冠を被り、こめかみ付近に炎髪を立て鬢髪が耳で巻き込む頭部、全体的に太造りの重厚な作風で、特に腰回りの張り出しが非常に大きく、下半身に重量感がある点などが挙げられる。これらの特徴を備える類例を挙げると、前者は観心寺像（大阪府）、若王寺像（大津市大石中）、後者は六波羅蜜寺像（京都府、天暦五年・九五一もしくは応和三年・九六三）、法隆寺講堂像（奈良県、正暦年間・九九〇～九九五）などが挙げられる。いずれの例も十世紀後半の作とされ、特に前者の特徴はこの期に特有の形式と考えられる。このため、本四天王像もこれらと同時期頃の作と考えられるが、十世紀中期の六波羅蜜寺像と比べて本四天王像は、各部に彫り直しがあることを差し引いても、面部や衣文の彫りが浅く穏やかになり、時代の降下をうかがわせる。また、やや足が短く重心が下方に位置する体形は、法隆寺像により近い。さらに、両腕以下がほとんど後補であることは注意が必要だが、いずれも腰のひねりが強く一見動勢が大きいように見えながら、全体としては静止した雰囲気を表出している。このように、例えば東寺講堂四天王像中の持国天像のように、今にも腕を振り下ろすかのような動勢から、浄瑠璃寺像（京都府）に代表されるような平安時代後期の動きが止まったかのような静的な様式への転換は十一世紀以降に顕著になるもので、本四天王像はその過渡期に位置していると考えられる。また、本四天王像中広目天像に見られる眉間の瘤状の盛り上がりや、持国天像の鋭く彫り込んだほうれい線は、六波羅蜜寺像あたりから康尚作の同聚院不動明王坐像（京都府、寛弘三年・一〇〇六）頃まで見られる特徴である。

以上のことから、一木造りで内刳りをほとんど施さない古様な構造も考慮に入れる必要はあるが、本四天王像の造立時期は十世紀末から十一世紀初頭と推定できる。

また本四天王像はいずれも兜を被らないが、四天王像のすべての像が兜を被らない例は十二世紀以前には少ない。その例としては清涼寺像（京都府、寛平八年・八九六頃）、禅定寺像（京都府、正暦二年・九九一頃）、万福寺像（島根県）、観心寺像などが挙げられる。清涼寺像、万福寺像が九世紀末まで遡るが、その後の傾向を鑑みると、十世紀後半頃から増えてくるようである。本四天王像もこのような流れの中に置けるものと考えられる。

## 本四天王像の位置づけ

平安時代以降の四天王像の形勢については、阿地瞿多訳『陀羅尼集経』に説く形式が改変を加えながらも広く伝播したことが指摘され、藤原良房（八〇四～八七二）発願の延暦寺根本中堂像もこの範疇に含まれるとされる(三)。また、この根本中堂像の形勢もある程度規範性を有し、天台系の寺院で継承された可能性が説かれている(四)。その特徴の一例として広目天が兜を被り、上の歯で下唇を噛む点が指摘されている。本四天王像にはこの形式の像は含まれないが、他方で本四天王像が造立された十世紀から十一世紀は甲賀地域に天台勢力が波及した時期とされ、この期の造立になる古像を多く伝える善水寺（湖南市岩根）や櫟野寺（甲賀町櫟野）がその拠点となったと考えられている点(五)は重要である。また、永昌寺（水口町宇川）地蔵菩薩立像、正福寺（湖南市正福寺）大日如来坐像、長福寺（甲賀町田堵野）聖観音菩薩坐像、阿弥陀寺（甲賀町櫟野）阿弥陀如来立像、元龍寺（甲賀町滝）十一面観音立像など、旧甲賀郡域には上記二箇寺に伝来する当該期の像に共通点を見出せる像が多数現存する。

このように、この地に伝来する十世紀から十一世紀の彫像を考える時、天台宗もしくは所謂延暦寺工房の影響を考慮に入れる必要があるが、その代表格といえる善水寺像と本四天王像の間にはそこまで積極的な影響関係を見出し得ない。一方で、延暦寺西塔法華堂には本四天王像と腰回りの張り出しや重厚な側面観が共通する十一世紀後半の四天王像が伝来

する。延暦寺像は鰭袖や腰甲縁の花弁形飾りなど、十二世紀に向かう華やかさがうかがえるが、全体の雰囲気としては本四天王像の様式の延長線上にあるものと考えられる。当該期に天台宗や延暦寺の造像を担った仏師集団には複数の異なった作風系統があったことが推定されているが(六)、本四天王像と善水寺像の間にもそのような関係を想定する必要があるかもしれない。また、泉福寺と同様最澄創建の伝承を有する天台宗寺院龍福寺（甲賀町滝）にも本四天王像とほぼ同時期の神将形像が伝来しているが(七)、本四天王像とはやや作風を異にしながら、髻前面に立ち上がる宝冠やこめかみ付近の炎髪、耳で鬢髪を巻き込む形式など頭部の表現が共通している。同時代における形式的流行ともいえるが、前記のような関係をここに求め得るようにも思える。

十世紀から十一世紀の甲賀地域の彫像について一括りに天台宗の影響下にあったとするのは早計だが、天台宗や延暦寺との影響関係が明らかな像と共通点が見出せる作例については、やはり第一にこの点を考慮に入れる必要がある。櫟野寺諸像を造立した仏師集団などは比叡山周辺からこの地に移動して造像を行い、その後も継続的に造仏活動を行ったと指摘されている(八)。現在このような傾向がうかがえるのは近江国では甲賀のみであり、非常に特徴的な地域といえる。本像もその特殊性の中に当てはめてみることで、より自然な解釈が可能となると考えられる。

（わずみ　こうすけ・滋賀県立琵琶湖文化館主任学芸員）

註

（一）調査は二〇二二年三月二日から三日にかけて実施し、筆者の他左記の各氏が参加した。

糸田美佐登、駒井文恵、佐野正晴（以上甲賀市教育委員会歴史文化財課）、桑原康郎、高梨純次（以上ＭＩＨＯ ＭＵＳＥＵＭ）。

なお、撮影は小池澄男氏（ＭＩＨＯ ＭＵＳＥＵＭ）が行い、本稿に掲載した図版はＭＩＨＯ ＭＵＳＥＵＭより提供を受けた。

（二）法量は左記のとおり。（数値はcm。足先開は外寸。）

広目天像

像高一〇五・〇／髪際高九五・九／頂―顎二二・一／面長一〇・二／面幅一〇・四／耳張一五・六／面奥一六・九／肘張四三・二／袖張五九・三／胸奥（右）一七・四（左）一七・七／腹奥一九・八／裾張二八・四／足先開三一・二

邪鬼　前後二六・二／左右三八・一／高一二・四

増長天像

像高一〇七・二／髪際高九四・八／頂―顎二四・〇／面長一一・五／面幅一〇・六／耳張一五・七／面奥一五・六／肘張五九・〇／袖張六八・六／胸奥（右）一六・七（左）一七・〇／腹奥二二・五／裾張三二・六／足先開三六・〇

邪鬼　前後二三・七／左右三六・六／高一九・九

多聞天像

像高一〇六・一／髪際高九二・六／頂―顎二四・一／面長一一・一／面幅九・四／耳張一七・一／面奥一六・八／肘張五一・四／袖張五八・五／胸奥（右）一六・五（左）一七・二／腹奥二〇・六／裾張二三・五／足先開三〇・五

邪鬼　前後二九・〇／左右三六・五／高一三・二

持国天像

像高一〇四・八／髪際高九二・三／頂―顎二四・五／面長一一・五／面幅一一・四／耳張一六・三／面奥一七・四／肘張五八・七／袖張六六・四／胸奥（右）一八・三（左）一八・七／腹奥二一・九／裾張三四・三／足先開三三・〇

邪鬼　前後二一・八／左右三六・三／高二一・四

（三）瀬山里志「陀羅尼集経様四天王像の日本における受容と展開」『佛教藝術』

二九三　毎日新聞社　一九九八年

（四）松岡久美子「滋賀・善水寺四天王像について―持国天・広目天の二像を中心に―」『栗東歴史民俗博物館紀』七　栗東歴史民俗博物館　二〇〇一年
井上大樹「六波羅蜜寺（西光寺）創建期諸像について」『美術史』一六〇　美術史学会　二〇〇六年

（五）高梨純次「甲賀谷の仏たち」『甲賀市史』一　古代の甲賀　甲賀市史編さん委員会編　二〇〇七年
岩田茂樹「甲賀の仏教彫刻」『甲賀市史』五　信楽焼・考古・美術工芸　甲賀市史編さん委員会編　二〇一三年

（六）岩田茂樹「康尚時代の延暦寺工房をめぐる試論―三軀の観音立像を中心に―」『学叢』二〇　京都国立博物館　一九九八年
松岡久美子「十・十一世紀における天台の野洲川流域進出の一側面」『テーマ展　近江の彫刻―湖南・甲賀の十・十一世紀―』　栗東歴史民俗博物館　二〇〇二年

（七）拙稿「龍福寺（甲賀市甲南町滝）所蔵　木造四天王立像」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』三七　滋賀県立琵琶湖文化館　二〇二一年

（八）註五岩田前掲論文

泉福寺住職安蔵玄周氏には調査において格別のご配慮を賜り、また本稿への写真掲載のご許可をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

泉福寺所蔵　木造四天王立像　広目天像

図２　広目天像　左側面

図１　広目天像　左斜側面

図４　広目天像　頭部正面

図３　広目天像　背面

泉福寺所蔵　木造四天王立像　増長天像

図６　増長天像　左側面

図５　増長天像　左斜側面

図８　増長天像　頭部正面

図７　増長天像　背面

泉福寺所蔵　木造四天王立像　多聞天像

図10　多聞天像　右側面

図９　多聞天像　右斜側面

図12　多聞天像　頭部正面

図11　多聞天像　背面

泉福寺所蔵　木造四天王立像　持国天像

図14　持国天像　右側面

図13　持国天像　右斜側面

図16　持国天像　頭部正面

図15　持国天像　背面